

実践報告

「日本教育大学院大学の『学校における実習』 初年度報告と分析*」

久保田武、出口英樹、大野精一、吉良 直
石塚秀雄、永井礼正、中岡 天

この共同研究は、平成 19 年度に実施した本学 2 年生の、先例がない「学校における実習」（以下「学校実習」とする）の報告と検証からなる。

本学の学校実習は、日本で最初の教員養成専門職大学院大学にふさわしく、実習先にもメリットがある実習を念頭に、実習校ごとに独自の实習計画に基づき実習を行った。即ち学部段階で行われる教育実習と異なり、学校教育全般に関わる様々な業務を、実習校の必要度に合わせ、できるだけ多く実習させることが基本的な考え方である。試行錯誤の繰り返しで課題も明らかになったが、ともかく実習は全員無事完了し、初期の最低目標は達成できた。

また実習内容の検証については、実習校ごとに異なる内容を三分類した結果、学習に関わる内容と学習以外の校務の混合タイプが多数を占め、また実習生の要望もここに集中していることがわかった。また三分類した実習生と実習校の中からそれぞれ標本を選んで聴き取り調査を行った。実習生の総計が 37 名と少なかったため、次年度以降の結果を合わせて分析を続ける必要があるが、実習校、実習生ともにおおむね満足していることがわかった。

キーワード： 学校における実習（学校実習）、互惠的学校実習、インターンシップ、
実習過程の類型化、実習過程の検証、実習ノート

1. 「学校実習」の概要

（1）本学の「学校実習」（正式には学校における実習）導入の意義

本学は日本最初の中等教員養成を目指す専門職大学院大学として平成 18 年 4 月に開校した。学生は全員学部時代に教育実習の単位を修得し教育免許状を所有している¹⁾。したがって修士課程修了時に上級免許状を取得するためさらに学校で実習をする必要はない。

しかし学部時代の教育実習は僅か 3 週間であり、それも授業見学と研究授業に著しく偏っている。

*本稿は、日本教育大学院大学の特定研究費助成金による共同研究の成果報告である。共同研究内容の構成は文末に記載。

教員の仕事の中心は授業であるが、それ以外にも多種多様な仕事がある。そこで本学では、全ての学生に、学部時代の教育実習とは異なり、授業以外のさまざまな仕事もできる「学校実習」を必修科目（4単位）として設置した。私は、日本国内の大学でこのような学校実習が正規の教育課程の中で行われていることを寡聞にしてまだ知らない²⁾。

（2）先例がない本校「学校実習」の特色（表1参照）

このような学校実習を企画するにあたり、最初に考えたことは、今日まで広く行われている教育実習のように、実習校の一方的な負担になる実習ではなく、実習校にとってもメリットがある実習形態を考えた。そうしないと、付属校を持たない本学にとって実習校さがしが難しいし、受け入れ校が見つかって継続に不安がある。そして何よりも、ただでさえ忙しい学校現場の負担を本校の実習のため一方的に増やすべきではないと考えたからである。また本学が認可されたばかりの株式会社立専門職大学院であり、知名度・信用度が教育委員会・中学・高校の間でまだ極めて低いことを考慮に入れた結果でもある。

このような現状分析から、授業中心の従来型教育実習ではなく、学校の様々な教育活動に徒弟奉公の精神で（今日の言葉に置き換えるならインターンシップ的ボランティアの心で）従事する実習を考えた。そうすることにより実習校の教育活動に資するとともに、幅広い現場の経験を持った学生を教育現場に送り出せる。また実習校から学生の働きが評価されれば、私立校ではそのまま就職に繋がる可能性があるし、事実初年度から可能性転じて現実になった学生も現れた。

実習内容を具体的に挙げると、学習指導の他に、教務、生活、学級、環境美化、部活動など幅広い分野を含むよう学校に依頼する方針をとった。すなわち、朝自習・朝読書や校門での指導、教員の出張・休暇・病欠などともなう学級指導や授業の代行、授業補助や一部授業の代行、各種講習補助、募集・広報活動補助、図書館運営補助、清掃指導、部活動指導、校外移動教室、体育祭、学園祭等への参加を想定した。

しかし現実には、これらすべての活動を網羅することはほとんど不可能である。また実習校の負担をかえって増やすことになるし、実習生もさまざまな仕事に振り回されることになりかねない。そこで学校と学生の事情が許す範囲内で、できるだけ広範囲の活動をさせてもらうこととし、その取捨選択は最終的に実習校にお任せした。あくまで実習校にとって最小限の負担でメリットが確保される実習を目指したわけである。したがって、実習校によっては、学部時代に行われる教育実習のように授業中心の実習を選択したところも少数ながらあった。

このような方針で実習を依頼した結果、いくつかの問題点も浮び上がった。まず第一に、学生が研究授業または授業見学を全くさせてもらえない実習校が現れ、実習生から強い不満が寄せられたことである。その学校では専任教員を配置する余裕がないため実習生を募集活動部門に貼り付けたのである。学部時代に教育実習で行った短時間の授業見学と研究授業だけでは不十分だという学生の不満はもっともなので、急遽当該実習校に授業実習の機会を与えるようお願いして遅まきながら

学生の不満に応えた。このようなことが再発しないように、2年目からは授業見学と研究授業を実習内容に含めてもらえるよう実習要綱を改めた。

二番目に、配属先に伴う実習内容の違いに対し不平等感を訴える学生もいた。文科省の査察時にも同じ内容の学校実習が望ましいとの指摘があった。しかしこれらの不満や指摘に対しては後述するような理由で基本方針を変えることはしなかった。

三番目に、一部の実習校から実習内容をもっとはっきり指示してもらわないと何をさせてよいか分かりにくいという指摘があった。確かにそういう側面は見落とせないが、といって画一的な指定をするのは実習校のニーズに出来るだけ合わせる実習とはならず、かえって多数の実習校が不利益を蒙ることになる。次善の策として、事前に実習校への趣旨説明をもっと徹底し、疑問をできるだけ減らしておく必要があると実感した³⁾。

四番目に、学内の一部から、実習の目標・ねらいをもっと明らかに示す必要があるという声が寄せられた。この考え方の背景は理解できるが、これも大学側の考え方を優先する発想であり、実習校側への配慮が足りないと考え、既定方針を変更しなかった。

なお実習を依頼した学校に、学長の依頼状とともに持参した実習要綱は**表1**のとおりである。実習は20日・160時間に達した段階で終了とし、双方の合意があれば延長できる。事実実習を延長した学生も相当数いたし、またそのような要請が実習校から少なからずあったことは、学生が実習校に貢献した証しと考えられる。また延長期間については大学から手当ての支給を要望し、多くの実習校で実現した。

次に実習は、原則として週1回実習校で行うことにしたが、学校と本人の話し合いにより随時日程変更ができる。例えば体育祭、文化祭、校外学習、学校説明会、夏休みの講習などの学校行事に参加するときなどである。また実習校は約4週間連続実習も選択できる。事実ごく少数ではあるがそのような実習も行われた。

(3) 学校実習の依頼と実習校の決定

初年度の学校実習校は、大学と(株)栄光のスタッフの知人関係を頼り、東京都公立中学・高等学校と首都圏私立中学・高等学校の中から選んでお願いした。ただし公立中学校は、原則として中学校が所属する区市教育委員会の紹介により決定する方法を取った。依頼にあたっては学校または教育委員会に実習担当者が学長の依頼状、実習要綱、大学案内を持参し、直接幹部に説明のうえお願いした。こうして決まった学校と人数は、

公立中学校 14校 (16名) — 品川区3校 (3名)、大田区3校 (3名)、杉並区1校 (3名)、八王子市3校 (3名)、日野市3校 (3名)、西東京市1校 (1名)

東京都立高等学校 3校 (4名)

私立中学高等学校 5校 (11名) — 東京都内4校 (10名)、埼玉県内1校 (1名)、

私立高等学校 4校 (6名) — 東京都内3校 (3名)、埼玉県内1校 (3名)

合計 26 校 (37 名) である。

なお学生の配属先は、学生の住所を最優先に考え、その他の条件を若干加味して決定した。

またすでに時間講師として私立高校に勤務していた 1 名は、本人および勤務校の希望が一致したので、講師をしながら実習を依頼することになった。また実習が始まってから 4 名の学生が当初予定した実習校の変更を余儀なくされた。うち 1 名は私立高校の現職教員。勤務校の勤務条件と実習予定校の日程の折り合いがつかず、結局勤務校での実習に変更した。また入学後 2 年目からある私学の準専任講師になった学生も、実習予定校との日程調整がつかなくなり、これまた実習先が講師勤務校に変更された。残りの 2 名は、学校側から実習中断または実習単位不認定の通告があり、それぞれ出身高校またはその系列校で、2 年目の 2 学期から急遽実習のやり直しをさせて間に合わせた。うち 1 名は実習は実質的に終わっており、学校側の単位不認定の理由は承服しがたいものであったが、紹介してもらった教育委員会の立場と本人の将来、そして開校後間もない本学最初の学校実習であることを考慮し、出身高校の系列校で実習を再度やらせてもらった。結果として本人も認めているようにこの措置は災いを転じて福となった。実習を 2 回、公立中学と私立高校で経験でき、二番目の実習校での評価は大変良く、大学院修了後実習校の専任講師にそのまま横滑りできたからである。

(4) 実習校での実習経緯

実習開始に当たっては、実習ノート (表 2 参照) 20 枚を全員に配布し、一日の実習終了後本人が記入したものを指導教員の点検を受け、原則としてその都度大学事務局教務課長に提出させた。事務局ではそれを個人別にファイルし、実習の進行状況を常時把握できるようにした。専任教員はそれぞれ自分が実習指導を担当する学生の実習校を、原則として開始時、中間、終了時前後の 3 回以上訪問し、学生および実習校スタッフと接触、実習の見学・指導と実習校スタッフとの情報交換などを行なった。この方式は、実習校と教育委員会サイドから「丸投げ実習」ではないと感心された。

実習は早い学生で 4 月から、大部分は 5 月から、一部は 9 月以降から始まり、終了は一部で 7 月、大多数は 10 月～12 月、一部は 1 月にずれ込んだ。例外として病気のため 3 月までかかった学生が 1 名いたが、ともかく 3 月の 2 年課程修了までに全員が学校実習の単位を修得することができた。

学校実習の評定は、大学で用意した実習評定表 (表 3 参照) に実習校が一次評定し、それを基本的に尊重したが、実習校による評定の温度差と実習内容の違いを調整し、実習生に提出させたレポートを参考に加え、大学の実習担当者の合議で最終評定をした。

注：1) 開校後 2 年間は社会人経験者のみを入学させたが、平成 20 年から大学新卒も受け入れている。しかし教員免許状を持っている条件は変更していない。

2) 日本教育学会の『教育学研究』で教育実習を正面から取り上げている論文はわずかに 1 編、柴田義松「教育実習の改善とその位置づけ」(第 51 巻第 1 号—1984 年 3 月) にすぎない。その他では、『早稲田教

育評論』第4巻第1号—1990年で、杉仁「教育実習事前指導の開発研究」がある。いずれも学部生対象の従来型実習に関わる論文である。

- 3) しかし、大学側が頭が下がるほど立派な計画に基づいて学生の実習を指導して頂いた学校も何校かあった。その中から、大田区立大森第六中学校（工藤長男前校長—現職 蒲田女子高等学校総務部長）の学生指導計画を表4に掲げておく。

表1

| 平成20年度学校における実習要綱 日本教育大学院大学 平成20年1月 | |
|------------------------------------|---|
| 1. 実習時間・日数と単位認定条件 | 合計160時間、20日（但し半日単位などの場合は当然増加） 但し終了後も実習校と学生双方の合意があれば、単位認定外実習として延長は可能。 |
| 2. 実習期間 | 原則として平成20年4月から同年12月まで。実習校の評定は遅くとも1月末日までに大学へ送付する。 |
| 3. 実習日設定 | 原則として毎週1日とし、通常の教員勤務時間帯に合わせる。但し実習校および実習生の協議により変更できる。例、連続集中方式（但し必要な出校日確保が望ましい）、長期休業期間と土日の勤務を含む。 |
| 4. 実習内容 | 大学としては授業、補習、自習監督や代講、生活指導、学級指導、環境美化活動、募集活動、部活動など可能な限りさまざまな分野を体験させることを希望しているが、最終的には実習校のニーズと事情にお任せする。但し学生の希望があれば授業見学と研究授業は必ず含めるものとする。また実習生の希望を予め聴取し、できる範囲で尊重するよう大学としてお願いする。 |
| 5. 記録と評定 | 実習校では実習生の指導教員を1名決める。実習生は実習日ごとに実習ノートをつけて指導教員に提出しその点検、捺印（署名も可）後、大学事務局にそのつど提出する。また実習校の指導教員は出欠票と実習ノートに勤務状況を毎回記録する。実習終了後(1..の条件を充たしたとき)実習校は実習成績を評定し、大学へ送付する(直接大学の指導担当教員に渡してもよい)。また実習生は実習レポート(A4版)を事務局担当者に提出する。 |
| 6. 大学側の指導と連絡、評定 | 大学は実習生一人ひとりに指導教員を決め、実習期間中実習校との連絡を密に取り、実習校に協力して実習生の指導に当たる。実習の最終成績評定は、実習校の評定を元にし、実習レポートなどを加味して大学が行う。 |
| 7. 実習の中断、中止 | 実習校の校長が、実習生の実習継続が適当でないと判断したときは大学の担当者にその旨事由とともに通知する。大学は原則としてその決定に従うものとする。 |
| 8. 大学の実習担当者 | 教師陣：久保田武、大野精一、出口英樹 事務局：中岡天 電話：03-3237-1811（代） FAX:03-3230-2810 |

表2

学校における実習ノート

| | |
|---------------------------|----------------------------|
| 実習者氏名 | 実習日 年 月 日 () |
| 実習校名 | 実習時間 時 分 ~ 時 分 (計 時間 分) |
| | 実習校所在地 |
| I. 本日の活動目標(事前記入) | |
| 実習時刻・時間/会場・場所 | 活動概要 |
| 目的 | |
| II. 本日の活動計画 | |
| 実習時刻・時間/会場・場所 | 活動概要 |
| 自己評価/メモ | |
| III. 本日の活動記録(事後に記入) | |
| 実習時刻・時間/会場・場所 | 活動概要 |
| 自己評価/メモ | |
| IV. 本日の反省・見いだされた課題(事後に記入) | |
| V. 指導者による評価・助言 | |

表3

学校における実習 評価表

| | | | |
|---|------|-------|----------|
| 氏名 | 学籍番号 | 年 月 日 | 年 月 日 |
| 実習校名 | 評価者 | 実習日数 | 日 (全 時間) |
| 以下の評価項目A~Eの該当するものに○をご記入ください。 (A:非常に優れている B:優れている C:平均的である D:やや劣っている E:劣っている) 必ずしも全項目について記入しなくても構いません。また各項目についてのコメントがあれば、特記事項欄をご利用ください。 各項目以外に実習活動がある場合は、総合所見の欄にご記入ください。 | | | |
| ① 出校状況(遅刻・早退等) | | | |
| 評価 | A | B | C |
| 特記事項 | | | |
| ② 学校行事・授業等への熱意・積極性 | | | |
| 評価 | A | B | C |
| 特記事項 | | | |
| ③ 学校行事・授業等の達成度(自ら主体的に活動を行う場合) | | | |
| 評価 | A | B | C |
| 特記事項 | | | |
| ④ 学校行事・授業等への貢献度(他者の活動をサポートする場合) | | | |
| 評価 | A | B | C |
| 特記事項 | | | |
| ⑤ 学校教職員としての振る舞い、態度、適格性 | | | |
| 評価 | A | B | C |
| 特記事項 | | | |
| ⑥ 総合所見 | | | |

表 4-1

| |
|--|
| 研修内容(案) 東京都大田区立大森第六中学校 (平成 19 年度) 学校実習計画 1. 学期始めの事務処理 1) 指導要録の学年更新事務(パソコン処理) 2) 諸帳簿の記入について 3) 文書作成について 2. 学校行事関係 ・運動会・文化祭・宿泊行事(移動教室・修学旅行)・キャリア教育(職場体験)など ・企画立案 3. 道徳教育について 4. 学級指導について 5. 各分室の仕事について 教務部・生活指導部・特活部・進路指導部・保健部・給食部・給食部・事務部 6. 特別支援教育について 7. 教科指導について 8. 生徒指導について 9. 生徒会・委員会活動について 10. 放課後の活動(部活動・他) 11. 評価・評定について |
|--|

表 4-2

| 研修予定表 | | 5月分 | 研修内容 |
|-------------------|---|---|--|
| 用 5 / 10 | 学 1 年 内 科 検 診 (1・2組) 1:10~保健室 | 事 ① ・ 校 長 講 話 ② ・ 教 務 部 に つ い て (深谷) ③ ・ 1 - 1 社 (五十嵐) 参観 ④ | 修 ① ・ 校 長 講 話 ② ・ 教 務 部 に つ い て (深谷) ③ ・ 1 - 1 社 (五十嵐) 参観 ④ |
| B | 放 * 2 - 1 で ⑤ ・ 校 務 処 理 (指 導 要 録 の 学 年 更 新 事 務 -1) (深谷) ⑥ ・ 参 観 | 給 * 2 - 1 で ⑤ ・ 校 務 処 理 (指 導 要 録 の 学 年 更 新 事 務 -1) (深谷) ⑥ ・ 参 観 | 内 給 * 2 - 1 で ⑤ ・ 校 務 処 理 (指 導 要 録 の 学 年 更 新 事 務 -1) (深谷) ⑥ ・ 参 観 |
| 5 / 17 | ・ 運 動 会 練 習 1 年 ①②校時 2年 ③校時 | 放 * 消 掃 活 動 ① ・ 運 動 会 練 習 1 年 ② ・ 運 動 会 練 習 1 年 ③ ・ 運 動 会 練 習 2 年 ④ | 修 ① ・ 運 動 会 練 習 1 年 ② ・ 運 動 会 練 習 1 年 ③ ・ 運 動 会 練 習 2 年 ④ |
| A | ・ 運 動 会 練 習 団 体 種 目 ①校時 ②校時 3年 ③④校時 | 給 * 2 - 2 で ⑤ ・ 校 務 処 理 (指 導 要 録 の 学 年 更 新 事 務 -2) (深谷) ⑥ ・ 生 徒 指 導 の あ り 方 に つ い て (木崎) | 修 給 * 2 - 2 で ⑤ ・ 校 務 処 理 (指 導 要 録 の 学 年 更 新 事 務 -2) (深谷) ⑥ ・ 生 徒 指 導 の あ り 方 に つ い て (木崎) |
| 5 / 24 | ・ 運 動 会 練 習 団 体 種 目 ①校時 ②校時 3年 ③④校時 | 給 * 2 - 3 で ⑤ ・ 参 観 ⑥ ・ 副 校 長 講 話 放 * 週 番 活 動 | 修 給 * 2 - 3 で ⑤ ・ 参 観 ⑥ ・ 副 校 長 講 話 放 * 週 番 活 動 |
| B | 運 動 会 予 行 + 反 省 会 | ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) | 修 ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) |
| 5 / 31 | 運 動 会 予 行 + 反 省 会 | ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) | 修 ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) |
| A | 運 動 会 予 行 + 反 省 会 | ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) | 修 ① 運 ② 動 ③ 会 ④ 予 給 * 2 - 4 で ⑤ 行 ⑥ 反 省 会 (規 則 堂 室) |

表 4-4

| 研修予定表 | | 7月分 | |
|--------------|---------------------------------------|-----|---------------------------------|
| 期 | 学 校 行 事 | 期 | 研 修 内 容 |
| 7 / 12 | 避難訓練 45分 所見メモ切 3:00 厳守 文化祭実行委員会 | ① | ・ 2300 授業(石川先生)T.T |
| | | ② | ・ 2200 授業(歴史) P.128 3-07ハの7/7侵略 |
| | | ③ | ・ 保健部の話(佐藤・井出) |
| | | ④ | ・ 2400 授業(歴史) P.128 3-07ハの7/7侵略 |
| | | 給 | * 1-3で |
| | | ⑤ | ・ 授業反省(深谷) |
| A | | ⑥ | ・ 避難訓練(9月防災訓練前の地域班編制) |

表 4-3

| 研修予定表 | | 6月分 | |
|------------------|---------------------------|-----|----------------------------|
| 期 | 学 校 行 事 | 期 | 研 修 内 容 |
| 6 / 2 土 | 運動会 *雨天の場合は、月曜日の 授業 | ① | ・ 道徳参観() |
| | | ② | ・ 運 * 用具係 |
| | | ③ | ・ 動 |
| | | ④ | ・ 会 |
| | | 給 | * 1-1で |
| | | ⑤ | ・ 運動会準備 |
| B | 2年移動教室説明会⑤⑥ 体育館 | ⑥ | ・ 運動会準備 |
| | | ① | ・ 校長講話 |
| | | ② | ・ 事務処理(出席簿の扱いについて)(深谷) |
| | | ③ | ・ 事務処理(指導要録押印)(深谷) |
| | | ④ | ・ 教材研究 |
| | | 給 | * 1-2で |
| 6 / 7 | 定期考査(英・体・技家) | ⑤ | ・ 移動教室説明会(会場準備から) |
| | | ⑥ | ・ 移動教室説明会 |
| | | ① | ・ 試験監督() |
| | | ② | ・ 試験監督() |
| | | ③ | ・ 試験監督() |
| | | ④ | ・ 事務処理(学級日誌の点検・コメント記入)(深谷) |
| 6 / 14 | プール前検診 素点メモ切 | 給 | * 1-3で |
| | | ⑤ | ・ 定期考査の処理について(深谷) |
| | | ⑥ | ・ 教材研究 |
| | | ① | ・ 副校長先生講話 |
| | | ② | ・ 通知文の作成について(深谷) |
| | | ③ | ・ 定期考査処理(素点入力・他)(深谷) |
| 6 / 21 | 進路指導部の話(吉野) | ④ | ・ 2200(地理)T・T授業 * 地形図の学習 |
| | | 給 | * 1-4で |
| | | ⑤ | ・ 進路指導部の話(吉野) |
| | | ⑥ | ・ 提出物(白地図)の処理――評価資料の収集 |
| | | | |
| | | | |

表 4-6

| 研修予定表 | | 10月分 | |
|-------|---------|--|---|
| 日 | 学 校 行 事 | 研 修 内 容 | 修 業 実 践 |
| 10/4 | 木 | ① 2-4 歴史 F.1.3.7 大政奉還と王政復古 * 授業実践 ② 2-1 歴史 F.1.4.0 富国強兵 * 授業実践 ③ * 反省、教材研究、授業準備 ④ 2-2 歴史 F.1.3.7 大政奉還と王政復古 * 授業実践 給 2-1 ⑤ * 校長講話 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 |
| 10/11 | 水 | ① 2-2(歴史) P.1.3.1 開国の影響から ② * 教材研究、授業準備 ③ 2-4(歴史) P.1.3.8 藩から県へ ④ 2-1(歴史) P.1.4.2 殖産興業 * 授業実践 給 2-1 ⑤ * 校長講話 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 |
| 10/18 | 木 | ① 2-4 歴史 F.1.4.0 徴兵令 * 授業実践 ② 2-1 歴史 P.1.4.3 文明開化 * 授業実践 ③ * 反省、教材研究、授業準備 ④ 2-2 歴史 F.1.4.0 徴兵令 * 授業実践 給 2-1 ⑤ 総合 * 60分練習 2-1 * 参観 ⑥ 総合 2-1 * 参観 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 |
| 10/25 | 金 | * 45分授業 ・朝練(8:00~) ・60分練習 * シート書き 舞台装置設置 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 |
| 10/26 | 土 | ① 2-2(歴史) P.1.4.2 殖産興業 * 授業実践 ② * 教材研究、授業準備 ③ 2-4(歴史) P.1.4.2 殖産興業 * 授業実践 ④ 2-1(歴史) P.1.4.8 岩倉使節団 * 授業実践 給 2-1 ⑤ 総合 * 60分練習 2-1 * 参観 ⑥ 総合 2-1 * 参観 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 |
| 10/27 | 日 | ① 朝練(7:45~) ④ * 合唱リハーサル(午前) 前日準備(午後) * 舞台リハーサル(会場作成後) | * 別紙実施案参照 * 会場作成(体育館) |
| 10/27 | 日 | 全 日 開校60周年記念 文化祭 | * 文化祭 合唱コンクール・舞台発表 * プロ、他参照 ○係分担任生徒指導 |

表 4-5

| 研修予定表 | | 9月分 | |
|-------|---------|--|--------------------------------------|
| 日 | 学 校 行 事 | 研 修 内 容 | 修 業 実 践 |
| 9/6 | 木 | ① 2-3 T(地理) * 参観 ② 2-2 歴史 * 参観 ③ 夏休み宿題点検 ④ 2-4 歴史 * 参観 給 2-1 ⑤ 夏休み宿題点検 ⑥ 反省・まとめ・次週に向けて | * 参観 * 参観 * 参観 * 参観 |
| 9/13 | 木 | ① 2-2(歴史) P.1.3.0 ベリーの来航 * 授業実践 ② * 教材研究、授業準備 ③ 2-4(歴史) P.1.3.0 ベリーの来航 * 授業実践 ④ 2-1(歴史) P.1.3.1 安政の大獄 * 授業実践 給 2-1 ⑤ * 校長講話 ⑥ 2-4(地理) 日本の気候-2 * 参観 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 参観 |
| 9/21 | 金 | ① 2-1 * 参観 ② * 教育相談について(廣瀬先生より) ③ 2-4 * 校長講話 ④ 2-2 * 宿題点検 給 2-1 ⑤ 2-3 地理 * 参観 * 宿題点検 ⑥ 1-4 * 参観 | * 参観 * 参観 * 参観 * 参観 * 参観 |
| 9/27 | 土 | ① 2-2(歴史) P.1.3.1 開国後の混乱 * 授業実践 ② * 教材研究、授業準備、反省 ③ 2-4(歴史) P.1.3.1 開国後の混乱 * 授業実践 ④ 2-1(歴史) P.1.3.8 明治維新 * 授業実践 給 2-1 ⑤ * 校長講話 ⑥ 2-4(地理) * 参観 | * 授業実践 * 授業実践 * 授業実践 * 参観 |

(久保田武)

2. 「学校実習」の検証1（実習過程の類型化と分析）

（1）本節の目的

本学の学校実習は、すでに前節で述べてあるように「授業だけではなく学校教員の様々な職務を可能な限り経験すること」を目指しており、言わば教員版インターンシップである。したがって、その内容は実習校ごとの事情やニーズを反映して多様なものとなっている。本稿の中心的なトピックは、その多様な実習を類型化し、検証することである。また、実習内容と同様、本学学生のバックグラウンドも多様である。このことが実習のあり方や成果にどのように影響しているのかという点についても、可能な限り言及したい。

そこで本稿ではまず、実習内容の類型化を試みた。その参考資料となるのは、学生が実習内容や感想等を記し、実習校の指導教員がそれらについて所見を記入した「実習ノート」である。平成19年度実習生37名の実習ノートを丹念に読み解き、そこから実習内容に関していくつかのキーワードを抽出し、それを元に実習内容のカテゴリー化を試みた。

次に、上記の類型が妥当であるか否かを検証するため、学生本人及び実習校の指導教員を対象に聴き取り調査を実施した。あらかじめ実習ノートから判断された実習の類型が実習生本人または指導教員から見て妥当であるかどうかの確認を行い、実習生各々の実習類型の確定を行った。その際、実習生本人の「実習以前の期待」と「実際の実習内容」の合致度合いや齟齬などによる実習の満足度、及び実習校の指導教員が見た実習の成果を同時に調査した。これによって、実習の成果についてもある程度の傾向が把握できるものと思われる。

以上の手順で、学校実習の効果を検証することが本稿の目的である。

（2）実習の類型仮説

実習ノートにおける実習内容の記述を確認すると、概ね表5のようなキーワードが登場した。

本学の学校実習のコンセプトは「可能な限り教員のあらゆる職務を経験すること」であり、授業などの直接的な教科教育活動だけではなく、いわゆる校務分掌に類する活動も可能な限り実習内容に取り入れることを実習校に依頼している。このため、ほとんどの学生が授業に関する業務以外の活動を行っていた。

さらに、(I)～(III)のそれぞれを細分化して実習内容の類型案を作成したものが表6である。

(I)については正規の授業の実施が中心(1A)、授業の補助が中心(1B)、授業で使用する教材の作成や補習授業など間接的に授業に関与する活動が中心(1C)という3つに大別した。(II)については生徒に直接的に指導したり一緒に作業をしたりする活動が中心(2B)、生徒とは関わらず1人で行う文書作成や学校内外のパトロールなどが中心(2C)という2つに大別した。(III)については授業への関与の仕方の違いに着目し、1A的な活動に校務を加えたもの(3A)、1B的な活動に校務を加えたもの(3B)、1C的な活動に校務を加えたもの(3C)と類別した。

表 5 実習内容のキーワード

| | |
|------------------------------------|---|
| (Ⅰ) 授業及びそれに関連する内容（広義の授業中心活動） | 「授業」「授業見学（他の実習生の授業見学を含む）」「試験監督（検定試験の監督を含む）」「自習指導」「補習授業」「補習授業補助」「HR」「授業に関する先輩教員の指導や講義」 |
| (Ⅱ) 校務や雑務など直接的に授業中心の活動に関わるわけではない内容 | 「清掃指導」「部活指導」「学校行事（説明会等）の準備・及び実施」「校門指導（遅刻指導）」「校内外のパトロール」「資料整理（新聞等のスクラップ作成を含む）」「会議への参加」「文書作成」「校内視察」「校務に関する先輩教員の指導や講義」 |

(実習ノートを元に筆者作成)

表 6 実習ノートから導出した実習類型

| | 記号 | 類型 | 内 容 |
|---------------|-----|---------|-----------------------------------|
| 教育 中心 1 | 1 A | 授業中心 | 実習生が正規の授業〔実習生が中心となるTTを含む〕を実施 |
| | 1 B | 授業補助中心 | 実習生が正規の授業の補助〔教員が行うTTの補助も含む〕を実施 |
| | 1 C | 教材作成中心 | 実習生が正規授業の教材作成や正規外の補習授業を実施 |
| 校務 中心 2 | 2 A | (項目削除) | (項目削除) |
| | 2 B | 生徒指導 | 進路指導、風紀指導、部活動など生徒とコミュニケーションの生じる業務 |
| | 2 C | 文書作成 | 文書作成、校内巡回、掃除などの業務〔生徒と共同で行う場合は2 B〕 |
| 混合 3 | 3 A | 授業+校務 | 1 Aと2 (B~C) の混合 |
| | 3 B | 授業補助+校務 | 1 Bと2 (B~C) の混合 |
| | 3 C | 教材作成+校務 | 1 Cと2 (B~C) の混合 |

※ 当初は「教材作成」を「2 A」とするつもりであったが、検討の結果、「それは授業活動の一環である」との判断から「1 C」に含めることとしたため、「2 A」は「項目削除」となっている。(筆者作成)

表 7 実習内容類型のプロットィング（大学院分類）

| | | |
|---------------|---|--------------------------|
| 教育 中心 1 | A | NY1 FN ST IH HT MT MK TS |
| | B | SM NY2 YT1 AY EN |
| | C | YH1 TJ |
| 校務 中心 2 | A | (項目削除) |
| | B | KT1 AH1 AH2 |
| | C | IA YH2 ME KH MY |
| 混合 3 | A | KT2 UH IY NY3 TH OM KT3 |
| | B | TK SR YT2 |
| | C | HN NH YK YS |

(筆者作成)

(3) 実習生及び実習校への聴き取り調査

前節における類型化が妥当なものかどうかを確かめるため、実習を終えた学生のうち12名、及びその実習校の指導教員の聴き取り調査を試みた。12名の選定に当たっては、全ての類型が含まれること、可能な限り多くの事例を把握するため同一実習校からは原則として1名のみを対象とすることに留意した(1校のみ例外)。表7からこの12名のみを抽出したものが表8である。

表8 聴き取り調査対象12名の本研究プロジェクトによる分類(大学院分類)

| | | |
|-----------|---|-----------|
| 教育中心 1 | A | MK |
| | B | SM YT1 AY |
| | C | YH1 |
| 校務中心 2 | A | (項目削除) |
| | B | KT1 AH1 |
| | C | IA |
| 混合 3 | A | UF IY |
| | B | SR |
| | C | NH |

(筆者作成)

表9 実習分類

| | 大学院分類 | 本人分類 | 実習校分類 | 本人希望 |
|-----|-------|---------|---------|------|
| MK | 1A | 1A | 1A | 3 |
| SM | 1B | 1B | 1C→1B | 3B |
| YT1 | 1B | 3A | 1C→1B | 2 |
| AY | 1B | 1B | 不明 | なし |
| YH | 1C | | 3Aまたは3B | |
| KT1 | 2B | 2B | 2(細分なし) | 1 |
| AH1 | 2B | 3B | 2(細分なし) | 2 |
| IA | 2C | 3A | 2C | 3 |
| UH | 3A | 3A | 不明 | 3 |
| IY | 3A | 3A | 3B→3A | 3A |
| SR | 3B | 3A | 3A | 2 |
| NH | 3C | 3Aまたは3B | 3Aまたは3B | 3 |

※「→」は時系列的に実習内容が変化したことを示す。(大野精一作成)

聴き取り調査の詳細な分析は次節に譲るとして、大学院分類で使用した類型の中から実習生が実習後に自らの実習を振り返ってそれを分類した結果（「本人分類」と呼称）、同様に実習校の指導教員が分類した結果（「実習校分類」と呼称）、及び実習生本人が実習前に期待していた実習の形態を実習類型から選んだ結果（「本人希望」と呼称）をまとめたものが**表9**である。

これを見ると、実習の類型について大学院の理解と実習生の理解、また実習校の理解は概ね共通していると言えよう。一部の例外については、なぜそのような齟齬が起こるのか、さらなる検討が必要であるが、ここでは一致している場合の方が多いことに注目し、大学院分類が妥当であると結論付けたい。

（４）結論と今後の課題

以上までの分析で、実習の類型の妥当性が確認された。だが、どのタイプの実習が最も効果的か、あるいは実習生の期待と実際の実習内容の一致や不一致が実習の成果にどの程度影響するのか、サンプル数が少ないこともあって明確な結論は得られなかった。

最後に、実習の属性と実習内容への期待、実際の実習の類型、その効果について、今回の研究で述べられる範囲で触れながら、今後の課題に言及したい。

既述のとおり本学は社会人を対象として発足した大学院大学であり、今回の調査対象となる平成19年度実習生は、そのほとんどが入学前に何らかの職業に従事していた経験を持つ。無論、中には学校の教員（非常勤を含む）や学習塾等で教壇に立っていた者も含まれるが、それ以外の経歴を持つ者の方が多い。その中には一般企業の従業員（アルバイトを含む）だけではなく、警察官や自衛官を含む公務員経験者も少なくない。

学校現場をある程度は知っている教員経験者はともかくとして、そうではない実習生が実習に望むものは、「未知なことを経験したり不得意なことを解消するような実習」か「既知のことを深めたり得意なものを延ばす実習」かのいずれかであろう。例えば、一般企業経験者が授業中心の実習を望む場合は前者であり、塾で教えた経験のある者が授業中心を望めば後者となる。

実習生の経歴と、それを背景として実習に何を期待するのか。この点を視野に入れつつ、今回の実習類型を用いながら、学校における実習の効果分析を続けていきたい。

（出口英樹）

3. 「学校実習」の検証 2—実習校と実習生の聴き取り調査 その1

（１）全体のまとめ

①目的と方法

前述の通り実習ノートに記述された実習内容によって実習を類型化した。大学院側でのこの類型が、①実習生や実習校での評価（類型判断等）と一致するかどうか（類型の妥当性）

を中心に、②実習生と実習校の成果記述は一致しているか（成果の一致）、さらに③一致しない場合に実習生の前職や実習希望とのかかわりはあるか（要因の特定）等につきさらに明確にする必要がある。さらに、④実習生の教科や性別で各分類分布で差異が生ずるかどうかも興味深い問題であるが、サンプル数の関係から今回は分析対象にしなかった。

次のような方法で実習校と実習生の聴き取り調査を行った。

- ・各類型に散らばるように実習生 12 人およびその実習生の実習校 8 校（聴き取り対象は校長・教頭・実習指導教諭等）をサンプルとした。具体的には大学院分類で 1-A が 1 人、1-B が 3 人、1-C が 1 人（調査時点で実習が終了していなかったため実習生聴き取りはできなかったが、この実習生の実習校の聴き取りはできた）2-B が 2 人、2-C が 1 人、3-A が 2 人、3-B が 1 人、3-C が 1 人である。
- ・聴き取りは本研究の共同研究者 7 人で行い、その各まとめは 6 人が分担した。
- ・聴き取りにあたった共同研究者間に重要な事項で漏れや差異等が生じないように、実習生および実習校を個別の対象にした「聴き取り」実施要項（その内容は付録資料の通りである）を作成し、これに準拠した。
- ・聞き取り調査の結果、合計 19 枚のレジュメを回収した。この中には実習校での聴き取り調査のない実習生 2 人分のレジュメが含まれている。
- ・分析はこれらのレジュメを資料にカテゴリー化し、共同研究者間で議論した。

②結果（表 9 参照）

各人別に大学院分類と「実習校分類」および「実習後本人結果分類」の一致度を見ると、大学院分類と「実習校分類」「実習後本人結果分類」との三者が完全に一致するものは 1 のみである。

「実習後本人結果分類」は散らばりがあり、大学院分類と完全に一致したもの 6、部分的に一致したもの（小項目不一致あるいは時間的な変遷等あり）2、不一致であったもの 3 である。

「実習校分類」と大学院分類との関係では完全に一致したもの 1 人、部分的に一致（上記と同じく小項目不一致あるいは時間的な変遷等あり）したもの 8 人で、不一致 1 人であった。

「実習校分類」と「実習後本人結果分類」との組み合わせで見ると、完全に一致したもの 3、部分的に一致したもの（同じく小項目不一致あるいは時間的な変遷等あり）3、不一致のもの 3 である。

「実習校分類」と「実習後本人結果分類」において大学院分類以外のカテゴリーを必要とした実習生や実習校はなかった。

実習生の前職や「実習前本人希望分類」と「本人実習成果認知」、あるいは「実習校分類」と「実習校成果認知」との関連は明確ではない。

なお、自由回答として聴取された事項は今後さらに細かいカテゴリー化が必要であるが、

実習校側からは「実習目的・内容・方法」、実習生側からはこれに加えて「教師や学校の実態（把握）」に関する記述が目につく。各例を3つあげれば、次の通りである。

1) 実習校側から

- ・学校実習の目的・目標を明確にして欲しい
- ・実習期間が「教育実習」より長かったのはとても良かった。
- ・即戦力として役立てて欲しいという大学院の切り込み方はよかった。

2) 実習生側から

- ・学校全体の流れや構造が理解できた。
- ・「教員免許もう持っているんでしょ」というふうに見てくれ、一人前の教師として扱ってくれた。
- ・職員室で最初は警戒された。居場所がなく、生徒と深く関われなかった。

③考察

本学では「学校における実習」がどのような内容を持つものか試行錯誤で模索してきた。

「学校における実習」としてどの内容が最適かは判然としないまでも、少なくとも本学で提起した実習の分類化は一定程度の妥当性や信頼性を持つものと思われる。

全国各地の教職大学院等で行われている「学校における実習」ばかりでなく、学部における「教育実習」にどのような内容が盛り込まれるべきか等の重要な検討資料となることを期待している。

(大野精一)

3. 「学校実習」の検証 2 — 実習校と実習生の聴き取り調査 その2

(1) 事例 1

①学生のデータ：30歳前後の女子学生。大学卒業後、中学受験予備校に勤務し、クラス担任として生徒・保護者の学習相談・受験面談を4年間担当した。その後、臨床検査会社の情報処理事業部に勤め、事務処理、営業フォロー、取引先担当、顧客窓口、クレーム処理などを1年間受け持った。社会人経験はあるが、教職経験はなかった。

②実習校：東京都多摩地区の市立中学校

③実習類型：1Aの授業中心、毎週一回出校型

④学生の学校実習に対する期待：

実習前に想像していた内容は、教室の後ろで担当教員の授業を見ながら、子どもたちと授業以外のところで接するスタイルで、お客さんのように教室に入る教育実習に近いものだった。生徒とは、お弁当と一緒に食べたり、休み時間に話すなどで、一度授業をやらせてもらえれば御の字と思っていた。

⑤学校実習の実態と成果：

教務主任の担当教員（社会科）の監督の下で、中2の地理の授業4コマと選択社会の授業1コマを実際に指導した。その他、定期考査採点、テスト返却、宿題プリント添削、地理ノートチェックなども行った。さらに、副担任として、朝の学活、昼食、帰り学活などに参加し、他教科授業を観察し、体育祭、合唱祭にも参加した。

実習校で授業をさせてもらい鍛えさせてもらったので、実習に関して満足している。医者になるには研修医での体験を経て自立する。この実習を通して私はまさに「研修教師」をやらせてもらい、フィードバックももらったことがよかった。指導教員とは上下関係があるので、授業の批評を謙虚に受け止めて授業力を伸ばすことができた。最初は一辺倒で発問もうまく行かなかったけれど、少しずつ生徒と対話ができるようになった。生徒が慕ってくれて楽しかったし、授業は面白かったと言うコメントをもらった。

学校実習の体験を履歴書に「社会科講師相当の教育支援活動」と書いているので、就職活動の際に、「地理を教えていたんですね」と面接担当者が言ってくれる。さらに、自分自身としても、授業を担当したことで、模擬授業をするように言われても自信を持ってすることができていることが最大の成果である。終わった時に、「教育実習」ではなく、「学校実習」だったなと思った。学校の受け入れ態勢に恵まれていて、一人前の教師として扱ってもらえたことがありがたかった。

⑥実習校の学校実習に対する取り組みと反省：

今回1Aの学校実習をさせて頂き満足しているが、さらに欲を言えば、3Aの方がいいかもしれない。授業以外の残りの半分としては、校務と言うよりも、学活、委員会活動、部活動などにもっと参加したかったが、実際は、授業時間が5コマあったので、それ以外の時間は限定的となった。

⑦社会人体験が活かされたか：

社会人体験を通して、コミュニケーション能力と積極的に仕事に取り組む姿勢を身につけた。自分から「これやっていいですか」という姿勢を身に付けていたので、今回の学校実習でも、ちょっと時間があったら、「教室に行ってもいいですか」と言えた。先生とのコミュニケーションもうまくできた。子どもへのアプローチも自分からできた。それは、自分の性格というよりも、職務体験が活きていたと思う。

（2）事例2

①学生のデータ：30歳前後の男子学生。大学卒業後、エレクトロニクス関連会社で営業技術・営業業務を5年程担当した。その後、外資系医療関連会社に転職し、医療用デバイスの営業業務を1年程担当した。社会人経験はあるが、教職経験はなかった。しかし、2年次の4月から埼玉県内の私立高校で非常勤講師として授業を担当しており、それと並行して6月から学校実習が始まった。

②実習校：東京都内の私立の共学高等学校

③実習類型 : 3A の授業＋校務、毎週一回出校型

④学生の学校実習に対する期待 :

「学校実習をやらなければならない」という側面と、何かをやることによって得るものがあるだろうと思っていた程度である。あえて言うなら、授業はある程度想像できるけれど、あまり想像できない生徒指導などをしたいと漠然と思っていた。

⑤学校実習の実態と成果 :

水曜 5 限の総合学習と 6 限の 1 コマの学活(LHR)を指導した。2 コマ連続で行う場合も多く、内容は文化祭の準備(具体的には店をどう作るか)、修学旅行の事前研修などである。指導教員は教室の後ろにはいるが、実習生が教壇に立って指導した。また副担任として、朝の HR、昼食、帰りの HR に参加し、さらに部活動(テニス部)、文化祭、その他生徒指導全般を担当した。

学校実習には満足している。そして、自分の力量形成に役に立った。同時並行して行われた私立高校での非常勤の理科の授業に加えて、この実習校でそれ以外の総合学習・HR の授業を持つことができたことが非常に有意義だった。さらに言えば、非常勤職があったから、理科には力を注がずに、それ以外の方に力を注げたが、もし非常勤職がなければ、実習校で理科の指導に関われるようお願いしていたと思う。実習校の指導教員は進路指導部長だったので、学校の進路指導に関して計画している教員の動きを観察できた。そしていろいろな会話をする中で、時折アドバイスを求めてくることもあり、自分の案が採用されることもあった。

総合とロング HR はやることが決まっていなくて、生徒のやる気のレベルが高いわけではないので、生徒をひきつけるために動機付けるのに苦労したが、その分学ぶことも多かった。実習校は指導が大変な生徒が多かったが、そこでいろいろ体験したことで、非常勤の高校(比較的指導は楽)でも余裕ができ、問題があったときに適切な対応ができたと思う。

⑥実習校の学校実習に対する取り組みと反省 :

自分の授業活動と重なっていてできなかったが、理科の授業が見られれば良かった。私の場合、たまたま非常勤で理科教育、実習校でその他の経験ができたが、制度的に、学生が希望する形態の実習ができるようにすると思う。ただ、自分の得意なことを希望して楽に実習をする学生も出るかもしれないので、教員側が学生に必要なものを把握して、相談の上、割り当てることも必要かもしれない。

⑦社会人体験が活かされたか :

社会人として、相手が興味を持っていないという前提で、分かりやすく説明する体験をした。生徒から好評だったのは、作業する時の説明がわかりやすかったということである。文化祭などのある目標のために、どういう手順でどういう工程で計画して準備していくかを詳しく説明したので、生徒はわかりやすかったとコメントしている。これは、社会人体験からくるものだとも言えるが、自分の社会人体験のほんの一部である。

(吉良 直)

3. 「学校実習」の検証2－実習校と実習生の聴き取り調査 その3

(1) 事例3

①学生のデータ : 30歳台後半の男子学生。入学前は民間の出版社で看護関係の教材(テキスト)を作成していた。

②実習校のデータ: 東京都内にある私立女子中学・高校

③実習内容の類型: 2B型 毎週一回出勤型

④学生の学校実習に対する期待と実習の実態

実習に入る前、学生はともかく授業を担当する事ができるのではないかという期待に胸をふくらませていた。しかし、週一回出勤という実習形態のため、学校側としては定期的に授業を担当させられず、結局、出勤日ごとに当日の仕事をこなす事が中心となってしまった。その結果、学校行事(遠足・文化祭等)に参加できたり、学校アンケートの集約にかかわる事ができ、学部時代の教育実習では得られぬ経験を積む事ができた反面、終日仕事が与えられないまま時間をつぶす苦痛を味わうことにもなった。

⑤実習校の学校実習に対する取り組みと反省:

実習生の毎週一回出勤という勤務形態がすべての問題の根源にある。実習生の期待する授業実習は、一単位の授業がほとんどない上に、毎週異なるクラスをつまみ食いの持たせる事は授業進捗の関係から難しい。結局、出勤日に学校行事があれば手伝ってもらったり、無いときは先生の手伝いや授業見学、自習監督等で一日を過ごすことになった。

大学側で本人の実習を指導する教員としては、折角の学校行事もその日の参加だけに終わり、それがどのように計画され、まとめられたかという全体の流れを把握させられず、熱心な実習生ただけに、期待に十分応えられず残念に思っている。また、学校行事への参加費や出勤日の給食費は誰が負担するのか等の問題はまだ残ったままである。

⑥考察

現在、各大学の学部を中心として行われている教育実習は、長い実践経験の中からその指導内容にも指導過程にも一定のパターンが確立している。ところが、本学の「学校実習」はまさに「本邦嚆矢」であるだけに、その実習の時期、内容、評価に関しては一つ一つ計画し実践し評価しながら構築していかなければならない。第一回目に当たる昨年度の実習は、その意味からも大きな資料を与えてくれたことになる。

まず問題になるのは、実習内容である。いくつかの実習校側からも指摘されているが、何を指導したらよいか明確になっていない。「インターンシップ的ボランティア」といっても具体的にどのようなことをすればよいか迷うところである。ここで最も必要な事は、学生の実態を十分心得ている指導教官が実習校の指導教員と十分話し合うことである。これは現行の「教育実習」でも十分できていないことであるが、指導内容が自由であるからこそ双方が十分話し合って決めていけばい

いのである。その結果、指導内容が授業中心となろうが、行事または生活指導中心となろうが、それは双方の事情と実態とを勘案の上定めたことであるから最も適切な内容となるに相違ない。

次に問題となるのは、実習の時期である。これは何月に行うのかという意味ではなく、毎週一回行うのか、二十日間連続して行うのか、あるいは別の形式で行うのか、という問題である。これも結論的に言えば、様々なパターンがあってもよい、ということになる。

今回の事例でも明白なように、授業を中心とした実習を望むのなら連続実習が望ましいし、学校行事を中心とした実習を期待するなら行事の前後にまとめて実習時期をとらねばなるまい。いずれにしる、実習開始前に、学生の希望と実態を心得た指導教員が実習校の指導教員と十二分に打ち合わせて決定する必要があるだろう。

まことに多様な学生を抱えた本学の「学校実習」は、一定のパターンを持つ実習とはならないであろう。様々な時期に様々な内容を持つ実習を展開するのが本学の「学校実習」である。ただ、そこに、立派な教師を育成するために、という柱が貫かれていることだけは忘れてはならない。

(石塚秀雄)

3. 「学校実習」の検証 2 — 実習校と実習生の聴き取り調査 その4

(1) 事例 4

- ①学生の特徴 : 25歳の女子学生。官庁の非常勤職員として、職員の旅費などの計算をPCで行っていた。
- ②実習校の特徴 : 東京都内にある公立中学校。
- ③実習内容の種類 : 1B型
- ④学生の学校実習に対する期待と実習の実態 :

実習に入る前は、現場では何をやるのだろうかという期待感のみであった。

実習校の環境から、学生の受け入れが、きわめてよい事例であり、メンタルな面では、校長自らが実習生との交換日記をされ、実習中あるいはそれ以前の疑問などについての率直な疑問、相談を真摯に受け入れていただいた。また、校長室なども自由に出入りすることにより、管理職の実務を間近で知ることができ、私人として、あるいは公人としての立場や責任についても深く考える機会を得ることができたようだ。前職では、職場の同僚から仕事仲間としては認識されてはいなかったようだが、現場の先生方も好意的で、実習生が単に実習生としての立場で学校にかかわっているのではなく、同僚として認識されているということからくる自信を得たようだ。教室において、生徒の抱えている問題が、表面上見えていることのみではなく、家庭、生活等に背景があることなども、学校カウンセラーなどもよく相談することができた。問題解決に際し、自分ひとりの問題として、狭く考えるのではなく、多くの同僚、専門家と協調する社会性を学んだようだ。

⑤実習校の学校実習に対する取り組みと反省：

受け入れが丁寧であり、運営がうまくいっている学校での実習であったため、現在多くの教育現場で起こっている深刻な問題を体験できなかったかもしれない。多様な現場の問題を経験し、認識するために複数の学校を回る。また、他校での実習生との間で進捗の情報交換を行う場を設定し、情報を共有できたほうがいいかもしれない。

⑥考察

この実習生の場合、平素の大学院での生活を見るかぎり、いささか内向的で、その社会性の不足がどうということから来るのかは、わからなかった。しかし、実習についてのインタビューから、そうしたことが前職に一因があること、また、そうした経験を実習において克服して行った感じが感じられた。

教育の現場に限らず、多様な現実の社会において、それが志した職業であったとしても、就職先がどのような環境であるかを推測することは難しい。しかし、どのような立場に置かれたとしても、その環境を改善する方策を提案し、実行する教師を育成するために本学は存在する。その趣旨から本学における学校実習は、単に現場における実習を超えて、他の実習生との情報交換を十分に行い、存続的な協調関係を築くための機会を提供するという一面があってもよいのではないだろうか。多様な形態の多様な学生による多様な実習が存在する、それがそれぞれの経験に留まらず、十分な議論のうえでの共有した知として学生に認識されるように配慮して、指導してゆくべきではないだろうか。

(永井礼正)

4. 学校実習の実情と課題 —— 事務局の立場から

はじめに

本研究冒頭文のように平成19年度の学校実習は、本大学院初の実習科目実施であり先例がない形式の実習であった。事務局教務課においては、大学・短大の学部で実施される教育職員1種・2種免許取得のための必須要件である『教育実習』との相違を、実習校と学生に認識してもらうことから仕事が始まった。以下に事務局が当面した学校実習の実情と課題を述べる。

(1) 提出物(実習ノート・実習レポート)について

学校実習に関連して、実習生の事務局への提出物は「実習ノート」「実習レポート」を基に、必要に応じて提出される「公休届」(学校実習による公休は3日まで認めている)などになる。

「実習ノート」は1日1枚を基本とし、実習日数分のノートが担当部署である教務課に届けられる。週1日の原則20週以上の長期間に亘る実習が原則かつ主流であり、提出は実習日の次に大学

院に登学する際に提出するようになってきている。概ね提出状況は良好だったが、一部にかなり前の実習ノートを平然と提出する学生も見受けられた。教員としての適性以前の問題でもあり、注意を喚起した。今後さらに改善を要する悪習である。

「実習レポート」については催促後やっと提出した実習生も少なくなく、提出期限までに未提出の実習生もいた。単に実習校での活動内容のみならず、事前・事後の処理や対応も実習の重要な要素であるべきであると考ええる。実習評価に対しこれまで以上に加味することが必要と考える。

なお、平成 20 年度から「実習予定表」の提出も義務付けており、概ね提出状況は良好になったが、開始後数ヶ月を経っても提出しないものも僅かながら見受けられた。

（２）実習費と実習校への謝礼について

実習費は当初、実習校への謝礼などに充当させることを目的に徴収する予定であった。しかし、諸般の事情から初年度は徴収せず大学院の予算から捻出することになった。実習校への謝礼内容は、ほぼ他学が実施する教育実習に準じたもので、私立中高校には謝金の形でおこなった。また公立中高校には謝金はせず、御礼の挨拶方々常識的な範囲に収まる手土産に留めた。

なお、平成 20 年度からは他学の教育実習の例にならい、実習費の一部を実習生より徴収する形態に変更した。

（３）実習生・実習校・大学院の相互連関について

学校実習という科目に関係する人的構成要素は、実習生（院生）・実習校（生徒・校長副校長等管理職教員・実習担当教員・事務局実習担当職員）・大学院（学校実習科目担当教員・実習生担当教員・事務局実習担当職員）からなる。全体として相互の連関が円滑に推移したことが結果的に稔りある実習に繋がっていったように思う。冒頭の説明にあるように「教育実習」が教科実習を主活動とするのに対し、本大学院の「学校における実習」の特徴は教員の担うべき広範囲の仕事内容を可能な限り多く体験し学ぶことにある。この意味において、実習生は単に指導対象の生徒や実習担当教員のみならず、実習校に関わる全ての人的かつ物的な動きを見聞しかつ関わることによって、学校全体の有機的活動を学んで欲しいと願っている。

なお、このような学校実習に対して、ほとんどの実習校で大学院側の学校実習の意図を理解していただいた。なかには実習校側の年間行事予定の中で、教育実習の学部学生と同時期の実習（連続実習）を余儀なくされた実習生もいたが、実習内容や対応に関しては格別の措置をしていただいた学校がほとんどであった。当初は、実習生の対応に戸惑われた学校もあったようであったが、平成 20 年度は前年度よりスムーズに進行している。

（４）事務局に寄せられた実習生の要望・不満

事務局に対し、実習への不満・要望を訴える実習生も少なくなかった。その種類は多様であった

が、実習校担当教員との関わりから発生したものや、実習内容に関するものが目立っていた。後者については、学生が実習校担当教員との意思疎通が欠如していたり、学校実習の意義を理解していない（教育実習の次元で考えている）という本末転倒の例もあり、これを機会に学校実習の意義と価値を再確認できた。平成20年度は学校実習の意義を啓蒙した結果、この種の苦情はほとんどなくなっている。

（5）おわりに

実習は、大学・学生（将来の教員）・生徒を繋ぐ重要な科目である。本大学院が教員養成専門職大学院を標榜し、さらに「社会人経験のある教員を要望する」現場の保護者の声に応えることを設立根拠の一つとしている以上、中等教育（中学・高校）現場への関与は不可欠である。この意味でも「学校実習」は最も重要な役割を担っている。学校実習の中で実習生には、客観的な視座・平等性のほか、暖かさと優しさをもって生徒に接してもらいたいと願っている。

最後に、本大学院の『学校における実習』にご協力いただいた公私立の中学校・高等学校の関係者の皆さまに事務局より心からの謝意を表す次第である。

（中岡 天）

5. 学校実習の総括

最後に、この実習の総括を箇条書きの形でまとめておく。

（1）評価できる点

- ①初回でもあり、試行錯誤のくりかえしであったが、ともかく実習を履修した第一期生全員37名が、単位を修得できた。
- ②多くの学生が、様々な分野にわたる学校教育活動を長期間（半年またはそれ以上）体験できた。
- ③多くの実習校から、実習生の活動を高く評価して頂いた。したがって当初の目的のひとつである相互互惠の実習が行われた。その結果、2年目の実習を引き続きお願いしたすべての公私立学校と教育委員会から、継続を承諾して頂いた。
- ④本学で始めた新しいタイプの学校実習が、特に公立中学校で求められていることが分かった。このことは、多くの地教委が近隣大学と提携し、さまざまな名目で学校支援要員として学生を受け入れている現状からも推察できる。

（2）課題

- ①実習先によって、実習の効果にかなりの差があった。その差をできるだけ縮小する工夫が必要である。そのために、実習校との事前の話し合いをさらに十分する必要がある。
- ②実習校にとっても、配当された学生の資質、意欲により、実習の効果にかなりの差があった。学生への事前指導の改善と、学生の適性を一層考えた実習先の決定が必要である。

- ③実習の考え方と内容を、実習校と実習生にさらに詳しく説明しておく必要がある。そうすることによって、相互の誤解が減らせる。
- ④現職専任教員を兼任している学生には、本人の希望により、学校実習の履修と習得を免除を検討する必要がある（カリキュラムの修正につながる）。
- ⑤現在在学2年目に行っている学校実習を、学生の希望によっては1年目の後期から実施できるか実習校の考え方も聴取し慎重に検討する必要がある。
- ⑥最後に20日、160時間、原則週1回という実習形態変更の是非については、実習校の意見を聴取し、教職大学院の事例も集め、慎重に検討する必要がある。

（3）終りに

末筆ながら、発足後間もない無名の専門職大学院が企画した、先例がない学校実習をお引受けくださり、実習生のご指導を賜った公私立中学高等学校と区市教育委員会に対し、本学として心より御礼申し上げるしだいである。

（久保田武）

共同研究内容の構成

共同研究内容の構成は次の通りである（括弧内は担当執筆者名）

研究概要と共同研究内容構成（久保田）

- 1. 「学校実習」の概要（久保田）
- 2. 「学校実習」の検証1（実習過程の類型化と分析）（出口）
- 3. 「学校実習」の検証2－実習校と実習生の聴き取り調査－その1（大野）
その2（吉良）
その3（石塚）
その4（永井）
- 4. 学校実習の実情と課題－事務局の立場から（中岡）
- 5. 学校実習の総括（久保田）

また執筆は分担したが、全員で意見交換し、最後に久保田が書式統一その他を調整した結果が最終原稿である。

Practice-based Report

Report and Analysis of the First “School Practicum” at Japan Professional School of Education

Kubota, Takeshi; Deguchi, Hideki; Ono, Seiichi;
Kira, Naoshi; Ishizuka, Hideo; Nagai, Yamasa; and Nakaoka, Takashi

This collaborative research study consists of report and analysis of an unprecedented “School Practicum” in Japan, which was designed for second-year graduate (master’s) students at Japan Professional School of Education (JPSE) during the academic year 2007-08.

The School Practicum, as it is appropriate for JPSE--the first professional graduate school of teacher education--in Japan, was designed with the idea of developing a mutually beneficial practicum. With this idea, students conducted various forms of School Practicum based on their own plans of practicum, deemed appropriate at their individual schools. That is, the main idea was to get the practice students involved in as many tasks as possible, encompassing the entire school affairs, based on the needs of the schools, in contrast to the Education Practicum conducted as part of teacher education programs at the undergraduate level. A few issues emerged during the first-year implementation with trial and error, but all students completed their school practicum, and accomplished the minimum original goal.

In terms of analysis, the contents of the school practicum were classified into three types (the first type focused on learning, the second type focused on school affairs, and the third type with a mixture of the two), and the third type with mixture of learning and school affairs constituted the majority, and this type was demanded by the students as well. This paper also contains the descriptions of interviews with selected students and schools that fall into three types of practicum. As the number of participating students was small at 37, there is a need to continuously analyze the results of the School Practicum during the following years, but on the whole, schools and students were satisfied with the practicum.

Key words: School Practicum, reciprocal practicum, internship, classification of practicum contents, analysis of practicum processes, practicum records
